

知足美加子「英彦山修験道における自然信仰と森林文化再考」 第42回日本山岳修験学会発表PPT 2022年



1

研究背景

英彦山修験道は自然を神仏として崇敬した。
英彦山の鬼杉・千本杉・行者杉などの
スギの霊木群は自然信仰観とどう関係するのか

「規制と開放の巧みな組み合わせによる
諸霊山独特の自然護持の形態」長野 覺

- 花粉分析によると九州のスギは最終氷期最盛期（約25000～15000年前）以前に姿を消し、天然スギが存在しないとされている。
- 後氷期RIIIa末期（約4500～1500年前）まで九州本島ではスギをみることができなかったが、RIIIb期（約1500年前以降）同時に九州各地でみられるようになる。

→人工的な植林の可能性

長野 覺「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然護持」『駒澤地理 25』1989年p.51
増田 祐雄「杉の歴史-過去一万五千年間」『科学5000』1980年pp.538-546

国指定天然記念物「鬼杉」
樹齢約1200年、幹周12.4m

2

研究目的・研究方法

なぜ英彦山修験道はスギを重要視したのか。

英彦山修験道とスギ挿木技術に関係はあるのだろうか

- 修験道に関するスギをリビングヘリテージ（生きている宗教的遺物）として着目し、文献調査や科学的調査、美術の表象分析を通して、修験道における自然信仰や森林文化のあり方を再考する。
- 英彦山に関する樹木を素材とし、英彦山修験道の自然信仰を造形化する芸術実践を試みる

3

先行研究

長野 覺「日本の山岳交通路としての修験道の峰入り道に関する研究」

『駒澤地理22』1986年pp.103-205

（英彦山深仙宿を出発する際）阿伽水、杉山最念入ノ検見、祖堂閉戸社拜、6ッ半発宿ス

安航『從因至果峰中日記』天保4年(1833)守静坊文書

1. 象徴：杉は常磐木。永久不変の象徴、霊の依代。
2. 効能：杉葉を宿の床に敷き浄化する。
3. 供物：「行者講」の8種の供物のうち、栗饅など食材の名前がないのは「杉饅」* だけ
4. 修行：新客は1日3荷の小木、毎日随意に雑小木(薪)を採る
5. 用材：杉皮は簡易の屋根材。生葉は線香原料。

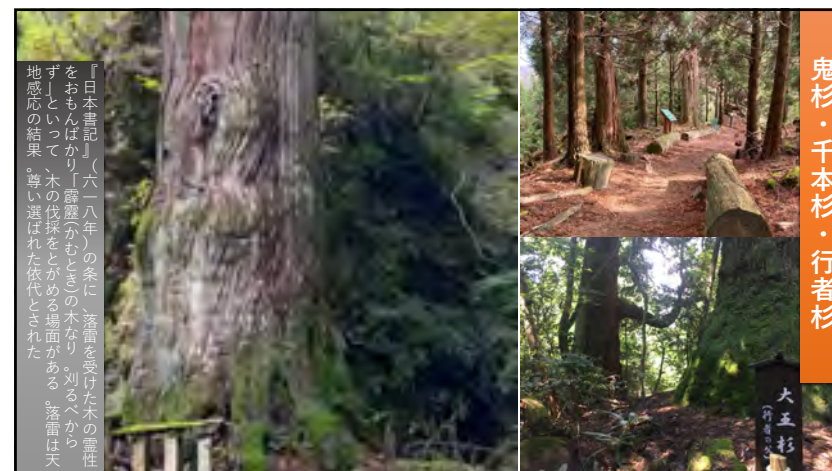
本研究では 象徴→自然信仰、擬死再生の概念、不動明王との関連
(森林文化とゾーニング)

*杉饅：3枚の杉の葉板に栗饅、蜜餞、豆餠・豆腐・苺七ツが盛られている
他の饅は、栗饅、大豆饅、小麦饅、大栗饅、梨饅(乾)饅など、いずれも五穀

4

樹木の生命力と英彦山

5



6

「産霊神社（行者堂）」

- 高木神は**雷**を使役する
* 建御雷神(たけみかづちのかみ)
- ムス→**植物の生命力**を神格化

覚仙杉：千本杉

文武天皇（飛鳥時代、大宝701-703年）

高皇産霊尊（別名**高木神**）
が鎮座した旧地）

奈良時代の天平12年（740）
聖武天皇の頼願：産霊神社（行者堂）
（藤原広嗣の乱と同年）

7

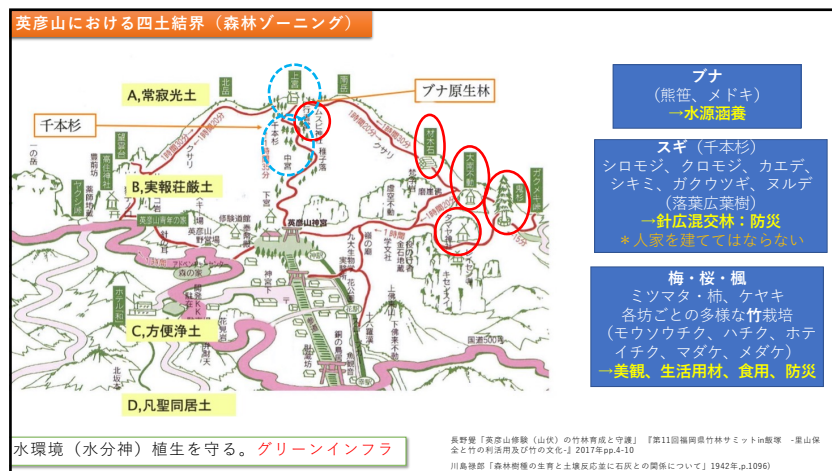
「材木石」

英彦山の大小の木材は木ではなく石だと伝わる。昔、たくさんの鬼たちが集まって居場所を作ろうとしたので、権現（山の神）は、夜明けまでに建てられるなら家を作ってもよいと告げた。しかし鬼たちが夜明け前に仕上げそうになったため、権現は鶏の鳴く真似をされた。さては夜が明けてしまったと鬼たちは皆逃げ去った。権現は十万ほどの金剛童子に命じ、弥勒菩薩が現れる時、大講堂を建築するための木を作り置いておいた。 栄宗『彦山見聞記』（1802年）

この材木石の説話に付随して、鬼が鬼杉を植樹するという話が民話として残されている。

- 「鬼が逃げる際に、**大地に挿したスギの杖が鬼杉になった**」
- 「鬼が建てた社の**柱の一本が後に芽を拭き、鬼杉になった**」

8



9

戦国時代、
天正9～15年(1581～1587)の争乱

→組織的・法的整備による森林再生

10

知雄義鈴「彦山権現験略記」
宝永六年（一七〇九）

天正15年
筑前31万
石の城主
となつた小早川
隆景は、
彦山山頂に
2000石
余を天下
の御所崎
和として
築城した。

天正一十七年（一五八九）の略

筑前（九州北部）を治める太守は代々（英彦山）権現を崇敬し、莊園の田に畝を置き靈廟を満たすことに費やしてきた。小早川隆景が太守となるがこれらがことごとく奪った。隆景は巨大な船を作ったが、帆柱（帆柱）が足りなかった。そこで英彦山に登り大きな杉を帆柱のために伐採した。船上で吉凶を占った。天気よく風も清らかで波もなかったのに、しばらくして、帆柱が急に船を壊し、後景は遠くへ、途中で返すもつて（占いを）視させても同じ光景がみえた。隆景はおおいに戦慄してただちに帰路についた。漸近して城をみると以前のままであった。また家臣の市正というものがいるには、一瞬にして風雨となり、たちまち三つの火の輪が旋回して落ちてきたという。考えるに、これは妖怪の仕業であろうと、剣をぬいてこれを討伐しようとするが悶絶してしまう。しばらくして目覚めるとそこには何も見えない。これはまさに神の目せることだと気づいた。もし本当に神の仕業ならば再び現れてこの神なのか教えてほしいと念じた。翌日、その言葉が終わる前に火の輪がまた現れ英彦山の三つの岳に飛んでいった。大驚き深く反省した。翌日このことを隆景に語った。隆景は帆柱が折れ海に溺れたことを意味を悟り、汗を流して大いに悔やんだ。そしてついに莊園の田を神に返し奉った。

天正一十七年（一五八九）の略

川島健二「彦山権現と天正一十七年」三五五～三五九頁

11

月岡芳年「小早川隆景彦山ノ天狗問答之図」『新形三十六怪撰』
「一八九〇年明治廿二年」

「左金吾殿いかなるものか。この山（英彦山）の樹木は開基このかた千百年の年月を経るといへども、葉や枝、幹にいたるまで折るなれ、抜くなれといわれってきた。これは神仏を崇敬するがゆえである。それなのに隆景。何の恐る心もなく樹木を伐採し、舟具に用いるとはなんと奇怪なことか。そなたは仁義の大道を体現し、神仏への帰依の心も深い。この末法の世には有り難き名將だと聞いていたのに、このような悪逆無道の挙動をするとは」

天正一十九年（一五九一）秋の話（大綱を切り取ったことになっている）

『陰徳太平記七十七』享保二年（一七一七）
* 彦山正徳「陰徳太平記卷之四」懐山書店 一九九二年二二頁

天保15年
1592-1593年
隆景の没
1597-1598年
（豊臣秀吉の死）

12

天正九年（1581）
大友義統の焼打により
一山が焦土と化す。

■1597年黒田長政が
社殿の再建を發願。
「作業奉行」「山奉
行」設置。

■1698年「惣物銀」
が発足：社堂修葺や緊
急事などの保険として
の共有基金

自治組織

宗教（山伏二派組織）

長野寛「英彦山修験道の歴史地理学的研究」名著出版p.216
長野寛「山岳宗教（修験道）集落英彦山の構造と経済的基盤」駒澤地理, 1979, p.22, p.42

13

玉泉坊
「杉二万五千本指立」
文化十年（1827）

守静坊寛淋 天保十一年(1840)寂
「杉一万本指立」
天保十年（1839）

守静坊普覺 嘉永二年(1849)寂
「杉五万本指立」
天保三年（1832）

長野寛「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然維持1」駒澤地理1989年

14

九州彦山條々
1600年

十三カ条法度
1642年

1671年

1686年

1698年

1868年

長野寛「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然維持1」駒澤地理1989年

15

泉蔵坊杉
樹齢800年
平成3年の台風で倒木

玉屋窟の杉
平成17年に伐採される

第2次世界大戦中、軍用に供出されようとしたとき、玉屋神社宮番の高田薫氏は伐材に抵抗し、木挽が大鋸を入れようとする巨杉の前に座り込み「我とともに切れ」と言って動かず、遂に伐材を断念させた。→平成16年(2004)台風の影響で伐採される。近年、玉屋窟に直接日光があたるようになり、窟内の霊水が減少（高千穂有昭禪宣談）

長野寛「日本人の山岳信仰に基づく聖域観による自然維持1」駒澤地理1989年

16

自然信仰と杉

→不動明王との関係

17

英彦山スギの由来

渡辺敦史（農学）＊調査継続中
スギ古木群の遺伝的関係の研究

■「英彦山神宮周辺のスギ
「千本杉」「鬼杉」「行者
杉」の2/3→独自性が高い

■江戸期霊木群の挿し木

■南岳の鬼杉群と、中岳の千
本杉・神宮スギは若干違い

■「行者杉」の1/3は山外在
来種に近い

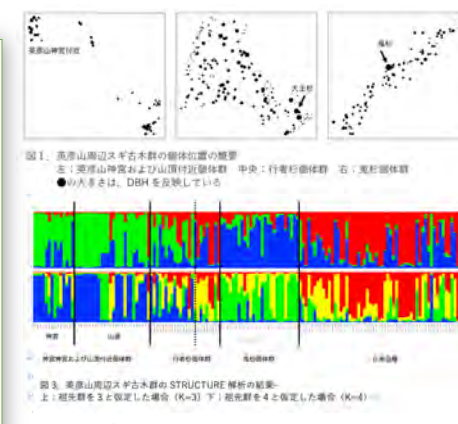


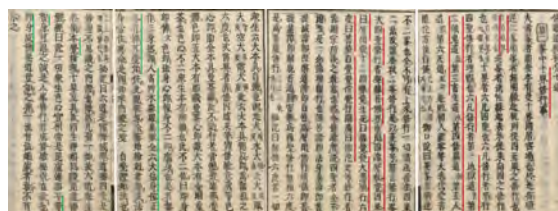
図1. 英彦山周辺スギ古木群の個体位置の概要
左：英彦山神宮および山頂付近個体群 中央：行者杉個体群 右：鬼杉個体群
●の大きさは、DBHを反映している

図3. 英彦山周辺スギ古木群のSTRUCTURE解析の結果
上：祖先群を3と指定した場合（K=3）下：祖先群を4と指定した場合（K=4）

英彦山周辺スギ古木群の遺伝的関係と九州在来品種起源の解明に向けて
河村直樹・田村英帆・渡辺敦史（九州大学大学院農学研究院）

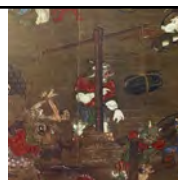
18

人畜草木森羅万象 全シ六大法身 依正 本有ノ佛ト覚知スベシ



阿毘跋闍【修驗道修要秘決(中)】1558年（寛政十年本）出典：信州大学附属図書館蔵書
＊赤線は「十界修行」、緑は「人畜草木森羅万象全シ六大法身依正本有佛覚知」
「本覚」「平等智」「即身成仏」

宮家準『修驗道聖典』『修驗修要秘決集』春秋社2022年



《六道・十王図第三編(部分)》室町時代
出典：『新りのかたち-仏教美術入門』
出光美術館2017年p.71



「重刊」出典：修驗道聖典『天上への道』
渡辺英彦山入修行』監修社2004年p.62

19

十界修行と杉

10 9 8 7 「四聖…佛界」
声聞…四諦の教えを聞き因果を覚る
縁覚…十二因縁を観て、生死を覚る
菩薩…大悲願を発して六度を行う
佛陀…自覚、覚他、覚行円満

正頂柱源供養 深仙宿
「正報（身体）」と「依報（環境）」を
六大、地、水、火、風、空、識」とし
これらを結ぶ「柱」になるための儀式

涌出（峯中の重要な行場で）
大地から信仰仏（不動明王）が出現すること
出生勧請（愛敬瀬戸）
先祖を供養し新たな命で出立（柴を投げる＝挿し木）

「六凡…地獄界」
1 地獄道＝業秤
2 餓鬼道＝穀断
3 畜生道＝水断（角突）
4 修羅道＝相撲
5 人間道＝懺悔
6 天道＝延年



20

増具

乳華酒源柱壇
木鬘水蓋源
識空風火水地

山伏＝十界を本来有する**不動明王**の直體「天地を水によって結び、火や風に転じて役立ち、**堅く動かない杉の姿**」に、修験者が不動明王を観想した

杉挿木は「**命の再生**」の象徴

次作法有口傳





東峰村行者堂・行者杉

21

仁王經曼荼羅

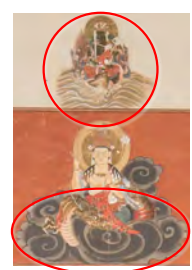
江戸時代(念賢坊)

「阿耨達童子」：蓮華の池水の無垢な使者。金翅鳥を頭上に、龍王にのる。
「水天」：右手に剣、左手に竜の索。頭上に五竜。水を操るマカラ（霊獣）にのる。

水

南・東・北・西
・調・息・増・減
・伏・益・法・法

『修験秘行法符咒(ふじゅ)集』
「不動八大童子梵書」

22

仁王經曼荼羅

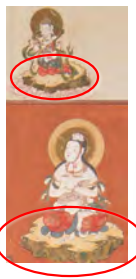
小花が咲く「木」の仏座

「地天」：衆生の乾いた心地に注ぐ智水の瓶を持つ。
「月天」：ガチョウに乗る。慈光・不老不死のソーマ（薬草酒）の盃

木

水と木への信仰

自然界への敬愛
「五穀豊穡」を願う曼荼羅

23

鬼杉

牛窟

大南不動窟
大南神社

不動明王

大威徳明王

金剛夜叉明王

軍荼利明王

降三世明王

鬼杉は「牛窟」の手前にある。牛窟は西方の大威徳明王が守護する。六足尊六面六臂・阿弥陀如来の化身。ヒンドゥー教の死の神ヤマ（閻魔天）を表す青い水牛に乗る。牛窟の「牛」は大威徳明王の鳥獣座ヤマを表すと考えられる。

大南神社の本尊銅製鑄造《不動明王坐像》(鎌倉時代)。不動明王が**大聖天童**として垂迹。御神跡でもあった。






24



25



26



27



28



29



30

まとめ

- 修験者にとってスギは「自然界の諸要素（六大：地水火風空識）」を結ぶ信仰上の象徴
- 挿木技法は「擬死再生」を具現化・涵養するもの
- 水や大地など「植物を滋養するもの」を重視する心は（スギのイメージを通して）不動明王信仰とつながる
- 「環境」を修験道文化とする考え方の重要性

英彦山修験道の自然観は
自然共生社会育成の糸口

英彦山鬼杉の実生苗の（鬼石坊）

31